

アボリジニはなぜ農民にならなかったか？

Why did Aborigines not become farmers?

John Hirst “Australian History in 7 Questions” より

2016年9月22日 荒川満

'If there are genuine questions about Australian history, there is something to puzzle over. The history ceases to be predictable—and dull.'

From the author of *The Shortest History of Europe*, acclaimed historian John Hirst, comes this fresh and stimulating approach to understanding Australia's past and present.

Hirst asks and answers questions that get to the heart of Australia's history:

- Why did Aborigines not become farmers?
- How did a penal colony change peacefully to a democracy?
- Why was Australia so prosperous so early?
- Why did the Australian colonies federate?
- What effect did convict origins have on national character?
- Why was the postwar migration programme a success?
- Why is Australia not a republic?

Engaging and enjoyable, and written for the novice and the expert alike, *Australian History in 7 Questions* explains how we became the nation we are today.

JOHN HIRST was a member of the History Department at La Trobe University and is now emeritus scholar. He has written many books on Australian history, including *Convict Society and Its Enemies*, *The Strange Birth of Colonial Democracy*, *The Sentimental Nation* and *Sense and Nonsense in Australian History*.

Cover design by Peter Long
Cover image by George Rapar
©The Trustees of the Natural History Museum, London

www.blackincbooks.com

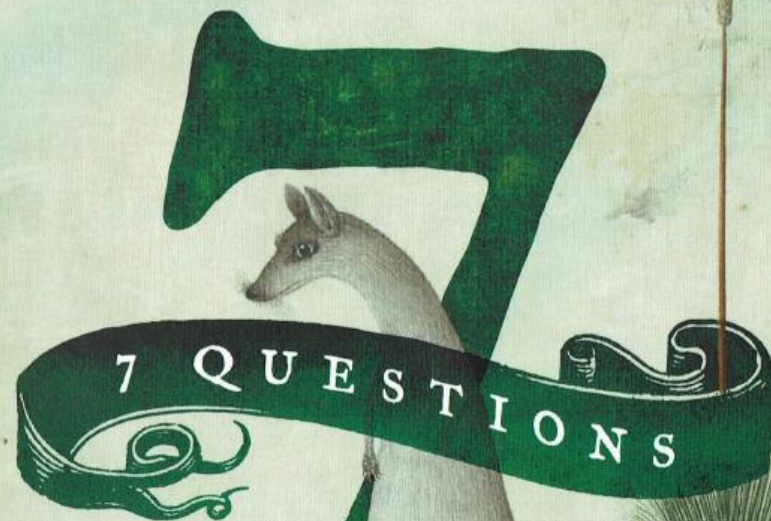
READINGS SLV
Australian History 1
AU
9 781863 958226
PEN 4/08/16
\$22.99

AUSTRALIAN HISTORY IN 7 QUESTIONS
JOHN HIRST

Black Inc.

'Every Australian should read this book' *The Monthly*

AUSTRALIAN HISTORY *in*



JOHN
HIRST

■ 著者: John Hirst

La Trobe大学 (Victoria州立大学) 歴史学部 名誉scholar

「囚人社会と敵対者」

「植民地における民主主義の誕生」

「感傷的なオーストラリア国民と歴史におけるセンスとナンセンス」

など、オーストラリアの歴史書を数多く執筆。

■ 書籍の購入年月日・場所

2016年8月11日、Melborne市にあるVictoria州立図書館内の書店“Readins”で購入した。

7つの質問

1. アボリジニはなぜ農民にならなかったか？

2. 囚人流刑地はどのようにして平和裡に民主国家に変わったか？
3. オーストラリアはなぜ早い時代に繁栄できたか？
4. オーストラリアの植民地はなぜ連合体になったか？
5. 囚人の始まりは国民の気質にどんな影響を与えたか？
6. 戦後の移民計画はなぜ成功したか？
7. オーストラリアはなぜ共和制でないのか？

「アボリジニはなぜ農民にならなかったか？」

議論のポイント

- 気候・土壌
- 成長段階（狩猟採集→農業→交易→工業生産）
- 劣等
- 文明化・定住化政策
- 権利（土地所有）
- 行動原理（移動）
- 世界観（土地・生き物・自然と共に）

「アボリジニはなぜ農民にならなかったか？」

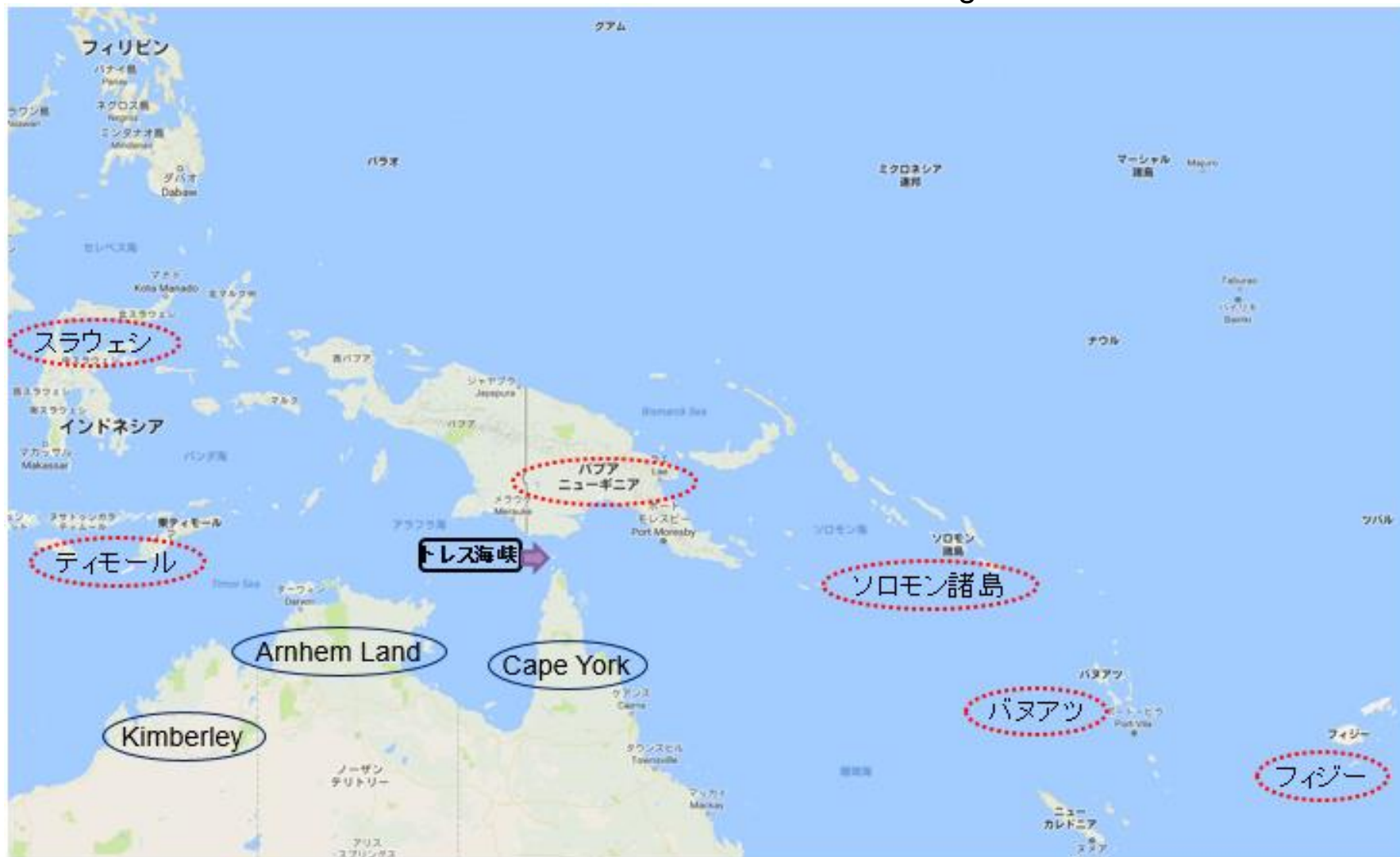
議論のポイント

- 気候・土壌が合わないせいかな。
- 先住民の成長段階は。(狩猟採集→農業→交易→工業生産)
- 劣っているのか。
- 文明化・定住化政策を施してみたが・・・
- 先住民の権利がないからか。(土地権利)
- 先住民の行動原理・志向はどうか。
- 先住民の世界観・宗教観との関係。

参考1:

農業はAudtrariaに近い太平洋の島々までは伝来したが・・・

<Googleマップベースに地域名を加筆>



参考2: ■Australiaの主な年表 <Wikipediaと本文より>

- 7万～1万年前 NewGuiniaと陸続き(サフル大陸)。この時期人類が到達。
- 1770年 英国人James Cook船長、Sydney南側のBotany湾に上陸。
- 1788年 米国に変わり囚人流刑地へ。
第一船団1030人到着(囚人736人)。植民地建設開始。
- 1851年 Sydneyでの金鉱発見を機に米国に次ぐ「ゴールド・ラッシュ」。
- 1976年 土地権利法が成立。北部で先住民の土地所有が可能に。<本文より>
- 1992年 「元々Australariaは無主地」の考え方を否定し、先住民は先住権原を持つとした(マボ判決) …翌年、先住権原法の成立

■人口動向 <Australian統計局より。先住民=アボリジニ+トレス>

1788年(入植) 859人	1900年 376万人	<先住民>	
1830年 7万人	1970年 1266万人	1788年 31万人(最小見積)	
1851年 43万人	2000年 1914万人	1901年 9万人	
1861年 116万人	2010年 2217万人	1996年 35万人	
		2001年 41万人	2011年54万人

■ 本書“7Questions” より

(備考) 議論のポイント関連記述箇所⇒例: 世界観

- 元始、人類は狩猟採集民族であった。
地球での農業の起こりは紀元前1万年。その後拡大し、オーストラリア近くまで来た。
しかし先住民の時代、農業は確立せず、アボリジニは狩猟採集民族として残った。
- ニューギニアの高地で始まった農業は、島内で終わり、まったく広がらなかった。
中国で始まった農業は、太平洋諸島に広がり、ティモール、ニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ、フィジーでは田畑・菜園ができ、定住する村落もできた。
- しかし、オーストラリア大陸のアボリジニは放浪者wandererのままであった。
- ニューギニアとの間のトレス海峡では、島民Melanesianが菜園栽培を行っていた。
オーストラリアCapeYorkのアボリジニは、この島民と交易した:
島民に、儀式用の“死人の首”を渡し、“槍投げ器(ウーメラ)”の使い方を教えた。
島民からは、精巧な“カヌー”を入手し、菜園の方法も学んだが、農民にはならなかった。
- 「オーストリアの土壌・気候・植物は農業に合わない」と言われることがある。 気候・土壌
しかし、CapeYorkは島と同条件。“芋”“ココナツ”も採集できたが、栽培しなかった。
- 西暦1700年頃から、ArnhemやKimberleysのアボリジニは“米”にも接してきた。
- インドネシア・スラウェシから“なまこ”を取りに来たMacassansが滞在用の“米”をアボリジニにも渡し、アボリジニは米を好んで食べ、スラウェシにも行って稲の成長も教わったが、自分で米を育てようとは思わなかった。
(やろうと思えばできた。事実、中国人はNorthen Territoryで米を育てている)

- 入植した西洋人は、「狩猟採集→農業→交易→工業生産」が成長プロセスと考えていた。このプロセスからすると、アボリジニは「先天的に劣っている人種」と考えていた。
- ヨーロッパでは19世紀に、人種について考え方が固まってきた。アボリジニは、今はやや遅れているが将来成長の可能性のある人種ではなく、「先天的に劣っている人種だ」という烙印が押されていた。
- 今では「人種差別」が語られることはないが……心の底では、「文明化は農業発展の結果だからアボリジニはやっぱり劣っている」と思っている人がまだいる。

成長段階

- しかし、彼らは本当に「劣っている」か？
- アボリジニの“鴨猟”の網は、英国製と同じくらい良くできている。
- 東南アジアに農業が広まった(4500-3500年前)のは人口増加に伴ってだが、アボリジニも人口増加に合わせて、自分たちの資源の使い方を工夫している。――「ダイエット食物」「貝殻で釣り針をつくる新技術」「沖合の島の開拓」「石造りの家とそこで定住生活の実現」など。

劣っているか

- 内陸のアボリジニは、農業的なことも行っている。天然の“クローバーシダ nardoo”を乾燥させ、種を取出し、粉にして、菓子焼いた。
- 定期的に“焼き畑 firestick farming”をやり、カンガルーたちが好む牧草を育成。
- 樹木が散在する広大な田園風景は、アボリジニが作ってきたものであり、後に英国本土においても、羊や牛を育てるために整備されるようになった。



- “芋”が群生している土地を大事にした。かといって自分たちで世話したり植え替えたりはしなかった。
- 以上のように、アボリジニの食糧の扱いの中には、農業的な要素があった。

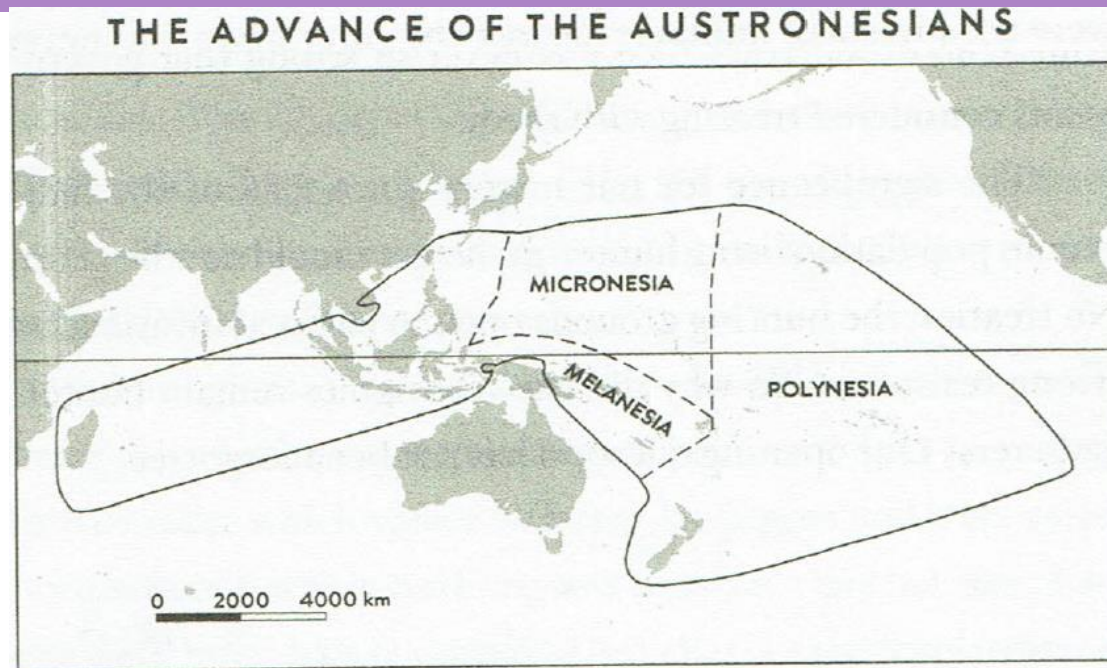


- このことから、歴史家・Bill Gammageは、「1788年(英国の入植)以前において、アボリジニは、農耕をしたが、農民ではなかった」と述べている。
- 農民になるということは定住につながる。
しかし、アボリジニは、定住よりも移動を好み、神聖なる大地とはあらゆる場所で繋がっていることを望んだ。



- 逆に、このことは英国人に「アボリジニはやはり遅れている」と確信させることになった。
- 1770年にCaptain CookがBotany湾に着いた時、木の皮で出来た小屋や、土地を耕さずに原野を走り回る人間を見なければ、囚人流刑地としてこの地を買う約束することもなかった。
(参考) 当時、すでにアメリカインディアンと条約を結び、NZのマオリ人も予定し、西アフリカも検討中であった。


- (当時のアボリジニの様子を見てみると・・・)
アボリジニは小さな集団で暮らしていた。全体で500を超える部族があり、部族毎に言葉は違っていた。相互に敵対することもあったが、小競り合いする程度で、大々的な態勢を組んだ戦いはしなかった。彼らの能力を超えていたからだ。
 - はじめは、アボリジニは西洋人を拒否もするが、理解しようとした。
そして西洋人の要求が理解できるようになった頃には、今度は西洋人の数に圧倒され、持ち込まれた病気に苦しめられるようになった。
 - それに抵抗しようとする、開拓者集団や原住民の警察隊(地域外のアボリジニを雇った)に押さえ込まれ、殺されもした。軍隊も使われたが、少人数ですんだ。
- 
- 1788年(英国入植)以来の歴史において
「貧困層は狩猟採集民族であった」という歴史の重要性は今こそ明らかにされるべきだ。
――それは、「正式な協定がなかったこと」「狩猟地は牧畜業者の侵略され放題だったこと」「強く抵抗しなかったこと」である。
- 
- オーストラリアのアボリジニは、農業の申し出に対して拒否するのが普通であったが、これは地球上のほとんどの狩猟採集民族も同じだ。
 - 農業の拡大は、最初、狩猟採集民族の領域に入り込み、押しのけながら進んでいくものだ。事実、オーストラリア北側に弧の形で連なる島々に南島語族Austronesianが訪れるのに伴って、農業も広がってきた。今日では、マダガスカルからインドネシア、太平洋の島々まで、みんな似た言葉話し、一つの農業民族の子孫となっている。




- 一方で、西洋人がオーストラリアに来た頃は、アボリジニはヨーロッパの小作農よりも生活水準が良かったかもしれないという見方もある。
狩猟採集は、短時間で食糧が手に入り、儀式・陰謀・遊びの時間は十分にあり、その点で、アボリジニは“豊かな遊牧民”でもあった。
- それに比べ、農業は多くの時間・労力を費やし、所有者と労働者の社会的差別も生まれやすい。それが農業容認に対するバリアーになっていると言われる。
- 狩猟採集民族は血縁間で食糧・資源を分かち合う。
個人が勝手に種まき・収穫・貯蔵に働きに行ったりすると、共同社会の絆は壊れてしまう。
- 今日でもアボリジニの結束は固く、個人事業へのバリアーは強い。
高い値段がつく作品を作るアーティストであっても豊かではなく、もうけは手放し、他の仲間と同じように、生活保護と年金で暮らそうとする。

- 狩猟から農作へ移行するということは、アボリジニにとって、単に、食糧獲得の仕方を変えるというものではない。狩猟採集の対象の動物・植物は、アボリジニの社会的・宗教的生活と密接に関係している。
アボリジニ社会では、神聖なる礼拝物totemであるカンガルーは食べてはいけない。むしろ増やす儀式を行うことが彼らの責任である。
- 女性や子どもに禁じられている食べ物、特別なときだけ許される食べ物がある。
- 動物や植物を食べはするが、自分たちと同じ霊界の仲間として尊敬している。
- 狩猟採集民族は、草地から穀類を取る――穀物の霊を取ることになるから、神が怒ると考える。

世界観

- 
- 狩猟採取民族の基本的立場は「狩猟採取民族として残ること」だ。我々の質問に対する答はこれである。
 - アボリジニを他の道に移行させることはできない。農業も十分なものではない。進歩的な農業者は到来しなかったし、アボリジニを変えることもできなかった。

- 
- 入植した英国人たちは、農業主義者であった。
 - 英国人たちは、アボリジニを文明化しキリスト教徒化しようとした。
 - そのため、農業への移行を最優先し、一定の場所に定住させようとした。
 - 定住に興味を持たせるために、伝道師たちは食べ物を配った。アボリジニも自分で作って増やそうとしたが、きつくて規則的な農作業には興味がわかなかった。
 - 農業は、きついし、内在する社会的な決まりがある。それは、一生懸命働く者は見下され、すました紳士の所有者が報われるということだ。アボリジニはそれに気付いている。

文明化

- 進化政策(文明化等)の難しさは、アボリジニが、財産を豊かにする西洋流の生活を望んでいないところにあった。太平洋の他の原住民のように、西洋人の財産をねたむこともなかった。欲しいものも余りないので働こうともしなかった。
- 1970年代になると、オーストラリアの北部では、伝道師や政府役人がいなくなり、農地が荒廃した。唯一、ミラネシア人やトレス海峡の島民だけが農業を維持していた。
- アボリジニは、「農業は我々のやり方じゃない。他の人がやればいい」と言うだけだった。



- こうなると、アボリジニを進化させたがっていた英国人自身の考え方が“退化”していった。――金をつくる一番の方法は、農業でなく、牧畜だ。
- オーストラリアの国土は全体が必ずしも牧草で覆われていなかったが、そこには羊や牛がいた。アボリジニの狩猟地の草を食べて生息していた。



- アボリジニに対する暴力がなくなってくると、以前からの自分たちの土地に残れるようになった。
- しかし、アボリジニの数は、大きく減った。それは暴力よりも病気が原因だった。



- かつて強制労働を強いた牧畜業者は、今では雇用という形を取るようになった。アボリジニは喜んで、牛飼いや羊飼いになった。

- 沿岸部の条件よい土地では、牧畜に西洋人が雇われ、アボリジニが1～2人という所もあった。1850年代のゴールドラッシュ時期は、西洋人がいなくなり、アボリジニの期待が大きくなった。そして彼らは期待以上の働きをした。




- 牧畜業者は、アボリジニの文明化やキリスト教徒化には関心がなかった。



- **また、アボリジニも一度仕事をすると、定職に就く気にはなれなかった。大地をあちこち歩き回ったり、人に物をねだったり、狩りをしたりすることを望んだ。**
- **雨期には牧場を離れ、仲間と一緒に、自分たちの土地を巡る長期徒歩旅行 walkaboutに出かけた。**
- Northern Territoryの牧場では、若い男女は働くが、子どもと老人は農場近くのキャンプで暮らしたりしている。
- ボスのために働くことは、アボリジニの伝統的考えに受け入れられた。しかし、働いても賃金はもらわず、目もくれない。アボリジニは強いボスのために働き、代わりに、ボスには彼らの共同社会を支援し守ってもらった。正に互恵的関係であり、ボスとはときに彼らの親族として扱われる。
- **アボリジニは、「自分たちは牛たちの中で生まれ、牧場を大きくした」と自慢する。**

- 1960年代に制度が変わり、牧畜業者は、これまでのアボリジニの賃金水準を白人並みに引き上げた。また、それ以降、アボリジニの雇用が控えられ、アボリジニのキャンプへの支援に変わっていった。彼らは社会福祉に頼るようになった。
- **そして、北部Northern Territoryでは、1976年、土地権利法が成立し、アボリジニの土地所有が認められるようになった。これで金を出せばアボリジニも自分の牧場が持てるようになった。**
- **そして1992年、オーストラリア高裁(Mabo判決)において、200年の歴史※をひっくり返して、原住民のもともとの土地所有権の存在を宣言した。**
<※:入植以前の先住民のもともとの土地所有権が否定されていた>。
土地は、売却や賃貸の行為によって権利が移動するが、土地との伝統的な関わりを示す証拠書類を示せば、権利は維持されるとした。

土地権利

- 
- しかし今日、課題も多い。
 - 西洋人の牧場はもうけのためであり、アボリジニには受け入れられなかった。
 - 一方で、アボリジニの一族郎党のつながりは、事業の効率的な経営には支障をきたした。
 - 遠い内陸の牧場で働くアボリジニの中には、健康・教育・雇用の面で生活保護に頼っている人がいる。

以上